

岩手県山田町の観光計画づくり

4

住民参加の観光復興

岩手県山田町 前水産商工課長

甲斐谷 芳一

三十数年の役所勤めで、半分は水産行政を、もう半分は商工観光や税務、財政、水道を担当してきた。実は、入庁して初めての職場は今と同じ水産商工課、後に商工観光課に異動で、観光行政の担当だった。数十年の時を経て、くしくもこのタイミングで関わることになった観光復興には、特別な強い思い入れを持っている。

山田町の概要

私の住む、岩手県下閉伊郡山田町は、岩手県の沿岸部陸中海岸のほぼ中央に位置し、北上山地が太平洋に沈降する典型的なりアス式海岸と、山田湾、船越湾の二つの湾が特徴的な地域である。その一部地域は三陸復興国立公園に指定されており、壁岩磯、赤松などの海岸性原生自然の景観に優れ、学術的にも価値が高い。

また、豊かな漁業資源に恵まれており、波が静かな山田湾と船越湾は好漁場・漁港となっている。カキ、イカ、アワビ、ウニ、ホタテ、ワカメ、サ

ケなどを収穫する水産業が営まれている。山田湾に広がる養殖筏の風景は山田のシンボルであり、多くの町民が思い起こすふるさとの原風景ともなっている。

人口は1万6592人（2015年4月1日現在）、1980年代から減少傾向にあったが、2011年（平成23年）以降の減少は、「東日本大震災」（以下、震災）の影響によるところも大きい（図）。

山田町に生まれて

私は、山田町の漁家に長男として生を受け、山田の海や山、歴史や文

化に親しみ、それらを慈しみながら、五十数年間、ずっとこの地で暮らしてきた。漁家に生まれ育ったことで、イカ漁やサケの定置網漁業、カキやホタテ養殖漁業の最盛期の様子を間近で見ってきたが、第一次産業は次第に低迷し、それと歩調を合わせるかのように、町は賑やかさを失っていた。

私が役場に就職した1979年（昭和54年）、漁業の将来は見通せないままではあったが、町にはまだ活気があり、観光船による船越半島巡りや国民宿舎「タブの木荘」などは、大勢の観光客で賑わいを見せていた。

山田町の観光の変遷

山田町の観光は、夏季を中心に、昭和40年代は、観光船からの船越半島や重茂半島の海岸美の探勝、オランダ島、荒神、前須賀での海水浴小谷島でのキャンプなどで賑わっていた。国民宿舎は多くの団体客に利用されていた。

その後、団体旅行の減少、個人グループ客の増加、観光や旅行に対する価値観の変化などを受けて、山田の観光も大きく変化してきた。観光事業は、需要に左右されやすく、利用者の減少により観光船は運航中止、国民宿舎は閉鎖となった。

図 岩手県山田町の概要



資料：岩手県人口移動報告年報、平成22年国勢調査、岩手県観光統計および山田町資料、山田町観光協会ウェブサイトなど

代わって、浦の浜地区を拠点に、アウトドア施設の「船越家族旅行村」や、遊園地「マリパーク山田」「鯨と海の科学館」「道の駅やまだ」を整備していくと、観光客数も増加していった。しかし、「マリパーク山田」は利用者の減少による収益の悪化を受けて、1999年(平成11年)に閉園となった。被災して休館中の「鯨と海の科学館」も厳しい経営が続いていた。

一方で、「ビーチフェスティバル」や「花火大会」「鮭まつり」「アサリまつり」「カキまつり」などのイベントは、企画や告知にさまざまな工夫を凝らしたことから年々参加者も増加し、大きな盛り上がりを見せ、誘客の目玉となっていた。こうしたイベントは、山田町観光協会を中心に、役場、漁協、商工会、道の駅など主要な団体が一体となって、町を活気づけようと取り組んで

きた。山田は小さい町なので、皆で取り組みざるを得ない事情もあるが、連帯した取組は、今後さらに重要になる。

2011年3月11日、3月議会最終日、14時46分、想像を絶する出来事が起こる。三陸沖を震源として

失われていく、ふるさと山田

「東北地方太平洋沖地震」が発生し、その後の大津波と相まって、東北から関東にかけての東日本一帯が甚大な被害を受けることになった。

山田町にも、大きな地震と大津波が襲ってきた。震度は5弱、15時22分頃には山田湾に津波が到達した。津波の推定の高さは8～10m、^{そじょう}遡上高は最大25mにまで及んだ。台風風の、それとも違う想定をはるかに超えたバケモノだった。各地で防潮堤が倒壊し、多くの建物や道路が流出・崩壊した。

山田地区では大規模な火災も広がった。がれきによって道路が寸断され、地震の影響で水道も停止したため、消火活動が十分に行えないまま、JR陸中山田駅を中心とする市街地は広範囲にわたって焼失した。地震、津波、火災により、800人を超える多くの方々が犠牲になった。私自身、母を亡くし、自宅をなくした。翌々日、町を歩くと、まるで映画の大規模なセットにでも入り込んだかのような、不思議な光景が広がっていた。まるで夢を見ているかのようなだった。地震、津波、火災が、

山田から多くの大切なものを奪っていった。

山田の観光復興を 考える

被災時、私は水道事業を担当しており、全壊した「ライフライン」の復旧に、全力で取り組んでいた。

町（行政）で最初にすべきは、行方不明者の捜索であり、道路の確保であり、がれきの処理、避難所の開



カキの養殖棚

設・運営だった。これまで誰も経験したことのない状況に、現場は混乱に混乱を極めていたのを鮮明に覚えている。

水道管の復旧を何とか成し遂げ、現在の部署に異動となり、水産業の復旧を手掛けることになった。水産業の復旧、まずは「漁業」、水揚げを再生することにこだわった。次は「流通」、市場、水産加工場の再開を急いだ。この間、被災した商工業の方々には仮施設で営業を再開し、次に備えていただいている。

さまざまな業務を通じて、各地からの派遣職員や民間企業の方と話す機会が増えていく中で、震災前には気づかなかった町の魅力に気づかされることも多かった。特に「山田湾とオランダ島」の景色は、誰もが高く評価してくださった。小さい頃から普通に眺めていた、丸い穏やかな湾とそこに浮かぶオランダ島から、大きな勇気をもたらしたような気がした。

町が比較的落ち着きを取

り戻した2014年（平成26年）、観光復興にも本格的に取り組まなければと考えていたちょうどその頃、町長からも同様のご指示をいただいた。

2012年度（平成24年度）後半から環境省の支援を受けて、エコツーリズム推進の検討会を組織していたこともあり、さらなる観光復興に向けた大きな議論を展開していく素地は整っていた。これまで以上に、官民一体となった住民参加の観光まちづくりに取り組み機運は高まりつつあったと感じている。

ビジョンの策定で こだわったこと

震災後の観光を復興し、産業として再生するためにはしっかりとビジョンが必要だと考えた。改めて現状を見つめ、新たな未来を創っていくためには、町内外の方々に訴える理由付けが必要だった。



山田湾に浮かぶオランダ島

説得力のあるビジョン、あるいは「〇〇計画」とは何だろう、震災前はどんな計画を作ってきただろうか。コンサルタントに資料を提供し、彼らの知見や経験でまとめられた、可もなく不可もない計画ではなかったか。自問自答を繰り返し、一つの結論にたどり着いた。

「観光復興ビジョン」は、行政とコンサルタントではなく、観光まちづくりに関わる当事者が、現場の目線で語り、作り上げていくことで、

仮に内容や表現が十分なものではなかったとしても、説得力のある、価値ある計画となる。皆で作りに上げていく過程で、町の魅力に気づき、山田の観光の歩むべき方向を議論し、観光復興の実現のために何をすべきかを検討していったほしい。策定の過程が人づくりにもつながるような取組にしたいとの想いもあった。

多種・類似の計画策定案件では、行政に、〇〇団体の代表や有識者などを招集して会合を開催することが多いが、今回は、今後の観光復興で重要な役割を担う、若手や中堅、女性を中心に、「策定ワーキング委員会」委員にご就任いただいた。「自然・エコツーリズム体験型観光」「物産」「グルメ・宿泊」の各分野で、次代の山田観光を担うさまざまなメンバーが集まった。これまであまり表には出てこなかった方、初めてお会いする方などいろいろあって、大きな喜びを感じ、「ひとつづくり」に期待を抱いた。



「山田町観光復興ビジョン」策定ワーキング委員会の様子

2015年（平成27年）5月19日、「山田町観光復興ビジョン策定委員会」からの付託を受けて、「策定ワーキング委員会」は、約1年間、ワーキング会議を全7回、専門部会を全15回開催し、「山田町観光復興ビジョン」の方針ならびに具体的内容について、濃密な議論を重ねてきた。行政はメンバーを集め、場を設定するだけで、議論には基本的に口を挟まなかった。進行は、今回のミッションのパートナー（公益財団法人）

日本交通公社にお任せした。ただし、観光関係者をはじめとしたメンバーの生の声を聞かせたいと思い、私をはじめ職員は可能な限り会議に同席させるようにした。

山田プライドを礎に 前進

2016年（平成28年）2月19日、「山田町観光復興ビジョン策定委員会」において、策定ワーキング委員会委員長の沼崎真也氏（山田町観光協会事務局長）より、答申が行われた。

皆で考えに考え抜いた「観光復興

山田プライド

我らがふるさと山田の、自然や暮らし・文化、地場産業の魅力や、町民一人ひとりが自信を持って伝えることで、町内外の交流を創出する観光を目指します。

ビジョン」。そして、多くの時間を割いてこだわった山田町の将来目標像（ビジョン）は、「山田プライド」。「山田町民」に向けた言葉であり、町民が覚えやすく日常的に使えなどの複合的な観点から選定された。

「観光復興ビジョン」には、今回の検討体制をベースとした、行政、民間事業者、町民などが参画し、協働で目標実現に向けた取組体制も記載されている。

引き続き、官民一体となった住民参加の観光まちづくりに強力に取り組み、震災前よりも魅力ある地域を創り出し、山田の観光復興を成し遂げたい。

（かいたに よしかず）



甲斐谷 芳一（かいたに よしかず）

山田町国保介護課長。1979年（昭和54年）6月、山田町役場入職。2008年（平成20年）4月水道事業所（係長）、2011年（平成23年）7月水産商工課水産チームリーダー（課長補佐）、2013年（平成25年）4月水産商工課長を経て現在に至る。

何気ない風景や町の匂い・人の交流を大切に 山田町観光協会の取組

一般社団法人山田町観光協会 事務局長 沼崎 真也

山田町へのUターン

私は岩手県山田町で生まれ、県外で進学・就職した後、36歳の時に山田町に戻ってきた。当時の観光協会事務局長に飲食店経験を買われてカキ小屋の運営に関わったことを皮切りに、イベント運営や、海水浴場での出店対応など、観光協会の業務に幅広く関わってきた。2015年（平成27年）7月から事務局長を務めている。

震災からの復旧

震災後は、あまりの被害の大きさに、もう観光協会の仕事はないものだと思っていた。しかし、道の駅で情報発信を続けている職員がおり、こんな時でも観光協会が機能するのかと驚き、職場復帰を決めた。復帰すると、観光施設や協会事務所の泥かき、鯨と海の科学館の収蔵資料の選別、ボランティアの作業の割り振りなど、やるべきことが山積していた。電気が通っていないため、朝から作業をして日が落ちたら解散という日々が長く続き、事務所機能が復活したのは9月ぐらいからだっ

たと思う。

沼崎 真也

町内の観光施設の復旧はカキ小屋が最初で2011年（平成23年）10月29日に再開した。主にボランティアの人たちや支援に来ていた行政関係者、震災前からの常連のお客様で賑わった。

その後、2012年（平成24年）4月に「船越家族旅行村」が再開、2013年（平成25年）4月に「観光物産館」と「と」が開業、2015年（平成27年）3月に「鯨と海の科学館」の躯体復旧工事が完了した。その間、町内では数多くの復興イベントが催され、町外からもイベントに招待していただくなど、多くの人の力で、着実に復旧が進められてきた。

震災後の町の雰囲気の変化

山田町では過疎・高齢化や産業の縮小が進む中、停滞感が漂い、新しいことに挑戦しても無駄だ、出る杭は打たれるといった雰囲気があった。

しかし、震災後は、新しいことをやれる土壌が生まれたというか、雰囲気は少し軽くなったように感じる。これは、各種支援の情報が得られやすくなったことが大きい。新しいことに興味

がある人に、周りの人が声をかけて情報提供するようになった。そのせいか、表舞台に新しい人が出てくるようになったし、復興イベントや観光商品づくりなどの取組を通じて、人のつながりにも広がりが出てきたようにも感じる。私たちは震災で多くのものを失ったが、震災からの復旧の中で生まれたものもあったのではないかと思う。

山田プライドに込めたメッセージ

2015年度（平成27年度）、町の「観光復興ビジョン」策定にWG委員長として参加した。町の観光の将来目標像は「山田プライド」に決まった。観光らしくない内向きな言葉だが、有名観光地ではない山田に観光客を呼ぶには、町民の「気の持ち方」が大事だと考えた。

山田町民は、謙遜して「こんな辺鄙なところに来て何もねえよ」と言いがちだが、本当に卑下してしまえば誰も来ない。でも、何か一つでも自分がおいしいと思っているものを伝えられるとか、見せたい浜辺を一つ言えるとか、そういうことから本人の意識が変わると思うし、その人の熱は観光客にも伝わるはずだ。

これからの山田の観光を想う

震災後、町を想う人が増えたと感じる。私も、失って初めてその価値に気づいたのかもしれない。

例えば、町中に漂う潮の匂い。震災

前は中小の水産加工場が集積し、今よりもずっと匂いが強かった。出張帰りにこの匂いを嗅ぐと「山田に帰ってきた」と感じさせられた。

豆腐屋のような日常の食生活の店がある風景も魅力だった。作り手と買手が直接顔を合わせていたから、商品だけでなく、作り手の色・個性や魅力も伝わっていたと思う。

私たちの町が、観光に取り組み上で大切にしなければならぬのは、こうした日常の何気ない風景や町の匂い、暮らす人と訪れる人の顔と顔を突き合わせた交流なのだと思う。

今後も、山田町の観光復興に向けて尽力していきたい。（談）

（ぬまざき しんや）

聞き手：観光地域研究部 吉谷地裕



沼崎 真也（ぬまざき しんや）

1973年（昭和48年）岩手県山田町生まれ。東京で飲食店勤務の後、36歳で山田町にUターンし、観光協会に勤務。2015年（平成27年）7月より現職。復興かき小屋、観光物産館「とつと」の運営をはじめ、各種イベントの企画運営にも携わる。

山田人としての誇りを持つて 道の駅の取組

山田町特産品販売協同組合 道の駅やまだ副支配人 豊間根 仁

岩手県下、多くの自治体の公社方式とは対照的に、山田町では民間が中心となり、水産業、農業、商業者の約40人が出資して、1999年（平成11年）に「山田町特産品販売協同組合」を設立し、「道の駅やまだ」を運営している。

道の駅やまだは、町の中心市街地から国道45号を南に下った船越地区の高台にあり、山田で取れた農産物や水産物、加工品などの販売や、観光情報の提供などを行っている。場所柄、地域住民の利用も多く、観光客には品揃えがスーパーのようだと驚かれることもある（笑）。

私は、山田町豊間根地区の出身で、一時、町を離れましたが、縁あってこの道の駅で働くようになった。

道の駅が被災者支援の拠点に

2011年（平成23年）3月11日、山田町は、地震、津波、火災に襲われ、町の中心部の建物の多くは流失・焼失し、国道は寸断、道の駅は孤立状態となった。幸い津波には遭わなかったの

で、震災直後から避難者を受け入れ、売り物の弁当、パンなどを配り、近所や避難所へも食料を分けて回った。

「避難所にいるより役に立ちたい」と、従業員からの声もあり、「自分たちがやらなければ、誰がやる」との想いで、1週間後3月18日、道の駅の再開を決断した。

ガス欠を心配しながら、盛岡まで車を走らせ、食料や、普段は扱わない下着、日用品などを積み込み、発電機を借りてきた。内陸に住む組合員からは無償で野菜や手づくり団子などが届いた。営業再開を組合員が一丸となって支えてくださった。

「臨時営業します」と看板を掲げたところ、自転車や徒歩で大勢の人がやって来た。ボランティアの利用も多かった。震災後1カ月間、従業員は交代で道の駅に寝泊まりを続け、懸命に支援活動に当たった。4月末まで臨時営業を行い、その後、通常営業を再開することに。

2013年（平成25年）頃までは、町外の被災地支援イベントへの引き合いがあり、「山田の現状を伝えたい。山田の物を買ってもらいたい」との想いで、多い時には月に4〜5回出掛けていった。この時のPRが効いたのか、おかげさまで道の駅の経営も安定してきた。

山田人として取り組む

震災後、自分は「山田人」であることを強く意識するようになり、地元愛も強くなった。周囲、特に「こんな田舎町は嫌だ」と言っていた若者の中にも「山田のために何かしたい」という人が増えたような気がしている。本当に頼もしい。

今年度、「山田町観光復興ビジョン」で、初めて町の事業に関わることになった時、「おっ、やっ」と声がかかったか」と思った（笑）。実は、観光復興は町がやっていること、そんな印象を少なからず持っていた。だから、今回、町が多様な人材を集めて議論する場を設けたのは、画期的なことと感じていた。

議論を尽くした観光の将来目標像「山田プライド」は、落ち着くべくして落ち着いた。納得感がある。

山田町には海があり、山があり、誇れるものがたくさんある。道の駅としても、これらをうまく活用していきたい。例えば、関係者の理解や場所の確保などの課題もあるが、できたらチャレンジショップのようなものを作ってみたい。イベントでは、生産者が直接PR、販売する機会を設けたい。道の駅とカキ小屋や観光施設とのタイアップも考えている。

山田の観光復興はまだ3割程度の状況と見ているが、私も、山田人として山田プライドを持って、観光まちづくりに取り組んでいきたい。（談）

（とよまね ひろし）

聞き手：観光地域研究部 吉澤清良



震災後、豊間根氏と、ボランティアの支援を受けて誕生した山田のゆるキャラ「たけちゃん・ヤマダちゃん」

豊間根 仁（とよまね ひろし）

岩手県立山田高等学校卒業後、衣料品関連会社での販売、観光施設での企画・営業、酒類販売店の責任者を経て、「山田町特産品販売協同組合」入組。現在に至る。